

+ 16 【かれい】

あのころは「築何年」なんて、うるさいことはいわなかったから、ぼくの家なんて「築百年」はくだらないはずです。

とにかく雨の多い村でしたから、普通の家は、茅葺き屋根の茅を三年に一度取り替えたり付け足したりしていましたが、ぼくのころはお金が無いのでそういうことができない。

そのせいで必ず雨漏りがします。

雨漏りがすると、いろんな種類の器がかりだされ、何をするにも不便になるくらいでした。

だからぼくにとって雨の音とは、雨がいろんな器に当たる雨の音なのです。

ぽぽんぽぽん
ぱぱちゃぱちゃ
ぴたぴたんぴた
ぴちよんぴちよ
たったった
ととととととん

雨の音楽は飽きない。

けれどそんなことよりも、雨の日は臭くてしかたがない。

庭にある便所は、すぐに床上浸水になるし、坂上にある肥溜（こえだめ）の便も我が家の敷地に流れて来ます。

それと雨の日は、蛇たちが雨宿りをするために、我が家の屋根裏に屯（たむろ）するので、蛇臭くてしかたがない。

それと蝦蟇（がま）も我が家の縁の下から土間にでてくるので、蝦蟇臭くてしかたがない。

あるとき懐爺にそのことをぼやくと、

「それは、便や蛇や蝦蟇の臭いじゃありませんよ」

というのでした。

「ちがうんか」

「それは、【かれい】というおぼけですよ。年寄りの加齢ではなく、魚の鱗でもなく、家の霊で【かれい】です」

「おぼけのにおいかい」

「おぼけのにおいというよりも、においのおぼけですかね」

同じことじゃないかとおもいましたが、

「においのおぼけかい」

「はい、においのおぼけ」

よく解らない。

においそのものがおぼけということなのか。

「その【かれい】は、どんなわるさをするんかのう」

「においがわるさですね。ただにおうだけなら、鼻をつまむか外へ逃げだせばいいんですけれど、【かれい】はにおいを人にうつします」

「わしもにおうかのう」

ぼくは自分のにおいを嗅いでみました。

「まだにおいがうつってはいませんが、さっさと【におい】を追いださないと、そのうち臭います」

「におってもええわい」

ぼくは強がりをいったわけではありません。

めったに風呂にはいらないので、臭ってもしかたがないし、においをうつすだけなら、そんなおぼけはちっともこわくはない。

「蛇臭いならまだしも、いずれ死人の臭い、死臭となります。そうしたらそのうち死にます。【かれい】というおぼけは、かほどに恐ろしいおぼけであって、決して軽く見てはいけません。【かれい】の仲間は沢山いて、【くされ】【へたれ】【くそったれ】などです」

「しぬよりさきに、ししゅうがくるんか」

「はい。死臭は死ぬより先です。死臭がするから死ぬのであって、死臭がなければ死にません」

「そんなら【かれい】をたいじしようかのう。わしにもたいじできるかのう」

「それはできます。あんがい簡単です」

懐爺は微笑みながらいいました。

「おしえてくれや」

「家の掃除をするだけです。天井や壁の煤を払ったり、床を磨いたり、畳を掃いたり、便所も拭くと、完璧（かんぺき）ですね」

「それだけかい」

「それだけです」

「なんじゃ、それだけかい」

というわけで、その日からぼくは自主的に家の掃除をすることにしました。

母親は喜ぶし、【かれい】は退治できるし、ぼくも運動になるから、文句はありませんが、なんだか懐爺にだまされた気がしてなりませんでした。